

縦筆

縦筆 じきうひつ

紹聖三年（一〇九七）八月 六十一歳（一〇九七）惠州にあつて作る

白頭蕭散滿霜風

白頭蕭散 霜風滿つ

小閣籐牀寄病容

小閣籐牀 病容を寄す

報道先生春睡美

報道す 先生 春睡の美なるを

道人輕打五更鐘

道人 輕く打つ 五更の鐘

○縦筆：筆に任せて、の意。別に縦筆三首の作がある

【解釈】こじんまりした部屋で、籐の寝台に病身をよこたえていると、さばさばとした白髪頭を秋風がなでまわす。「先生は春のうまいさながらに、まだよくお休みだよ」と、道人に知らせてくれたのか、五更を告げる鐘を、道人がそつと打ってくれているようだ。

漢詩大系 蘇東坡 近藤光男より抄出

【参考】縦筆三首 其一 元符二年（一〇九九）十二月、六十四歳 儋州に在つての作。

寂寂東坡一病翁

寂々たり 東坡の 一病翁

白須蕭散滿霜風

白須蕭散として 霜風滿つ

小兒誤喜朱顏在

小兒 誤りて喜ぶ 朱顏在るを

一笑那知是酒紅

一笑す 那ぞ知らん 是れ酒紅なるを

【解釈】筆のままに その一

ひっそりと生きる東坡の病める一翁。白いひげがわびしく。霜や風にさらされる。幼子は間違つて顔色がいいと喜ぶ。酒で赤らんだとも知らないのには笑ってしまう。

「中国名詩選 下三三八頁」川合康三編訳 岩波文庫より抄出

須は鬚と同じ。惠州での作「縦筆」に「白頭蕭散滿霜風 白頭蕭散 霜風滿つ」の句があり、この承句と酷似する。

酒紅、酒で赤みがさすこと。転句の朱顔とともに白居易の詩を踏まえている。

白居易の「自詠」の詩に「夜鏡隱白髮、朝酒發紅顏（夜鏡白髮を隠し、朝酒紅顏発す）」とあり、「醉中對紅葉」の詩に「醉貌如霜葉、雖紅不是春。（醉貌霜葉如く、紅なりと雖も是れ春ならず）」とあるのを換骨奪胎したもの。

「蘇東坡詩選」小川環樹・山本和義 選訳岩波文庫より抄出

「点鉄成金」「換骨奪胎」…先人の詩句を加工して新たな詩を作る。